

# バードリサーチ ニュース

2006年1月号 Vol.3 No.1



2006. 1.13.

Photo by Takagi Kentaro

## 活動報告

### 鳥インフルエンザ関連の渡り鳥の調査に参加することになりました

植田睦之

2004年1月から2月にかけて、山口県、京都府そして大分県で高病原性鳥インフルエンザが発生して大きな社会問題になりました。その後は日本では大発生は起きていませんが、中国や東南アジアそして西シベリアからヨーロッパへと拡散していて、世界的な問題になってきています。この鳥インフルエンザに関連したウイルスと渡り鳥の調査にバードリサーチも加わることになりました。

この調査は、文部科学省の科学技術振興調整費による「野鳥由来ウイルスの生態解明とゲノム解析」という調査で、国立感染症研究所が中心となってウイルスを持ち込む可能性のある鳥類の渡り経路やウイルスの保有状況を明らかにして、日本への渡り鳥による高病原性鳥インフルエンザの侵入の有無や可能性について検討するとともに、ウイルスのゲノム情報のデータベース化を行ない、ワクチン開発、創薬に貢献することを目的としています( [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/17/10/05102801/001/002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/10/05102801/001/002.pdf) )。

今年度は予備調査として、調査対象や方法、実施場所などについて検討しているところです。



写真1. キンクロハジロとオナガガモ。

もちろん、バードリサーチにはウイルスについての知識はありませんので、私たちが担うのは、国内外の鳥類の渡り経路や状況を明らかにする部分です。これを東京大学生物多様性科学研究室(樋口研)が中心となり、一緒に研究を進めていきます。

一般に鳥インフルエンザと呼ばれている高病原性のものでなく、病原性の低い別の型のウイルスですが、淡水性カモ類がほかの鳥と比べて高い確率で保有していることが

知られています。そこで、今回の調査の主要な対象の1つはカモ類を考えています。また、水田地帯などの人里に飛来し、養鶏場のまわりなどにも来る可能性がある渡り鳥として、ミヤマガラスの調査も考えています。これらの鳥たちに衛星追跡用の送信機を装着して、移動経路を追跡するとともに、各地の飛来数の季節的な変化を記録することで、日本国内の移動状況を解明したいと思っています。



写真2. ミヤマガラス。

また、日本に渡ってくる鳥たちの多くは小型の鳥です。これらの鳥たちがウイルスを保有していることは確かめられていませんが、小鳥たちの渡りの状況も把握したいと考えています。衛星追跡調査でも目視調査でも状況を把握することの難しい夜に渡る小鳥類の渡りの状況を明らかにするために、レーダーを使ったり、ニュースレター2005年10月号でご紹介した月面調査を発展させた調査方法を開発したりすることも考えています。

これらの調査を実施していく上で、特にカモ類やミヤマガラスの飛来状況の調査、月面調査では、みなさんのご協力なしに良い成果をあげることはできません。調査の詳細が決まりましたら、ご協力をお願いすることになると思いますので、その際はよろしくお願いいたします。

### 参考ホームページ

鳥インフルエンザは社会的な問題にもなっていますので、知人などから聞かれることも多いと思います。鳥インフルエンザについての情報は日本鳥学会や日本野鳥の会のホームページに詳しくまとめられているので、ご興味のある方はご覧ください。

日本鳥学会の鳥インフルエンザのページ

[http://wwwsoc.nii.ac.jp/osj/japanese/materials/birdflu/birdflu\\_main.html](http://wwwsoc.nii.ac.jp/osj/japanese/materials/birdflu/birdflu_main.html)

日本野鳥の会の鳥インフルエンザのページ

[http://www.wbsj.org/nature/hogo/kyozon/rikai\\_inful.html](http://www.wbsj.org/nature/hogo/kyozon/rikai_inful.html)



写真3. マガモ。

[ Photo by  
谷英雄 ]

## 活動報告

### カワウプロジェクトの取り組み

加藤ななえ・高木憲太郎

#### 1. 特定鳥獣保護管理計画と広域協議会

個体数が急に増加して被害問題が起きたり、逆に急に減少しているような鳥獣の保護管理のために、種ごとの管理計画を立てるための制度が「特定鳥獣保護管理計画」です。この計画は都道府県ごとに策定されるのですが、そのための解説書が「特定鳥獣保護管理技術マニュアル」と呼ばれるものです。これまでにシカ、カモシカ、サル、クマ、イノシシで作られてきました。

カワウは、1970年代には絶滅が危惧されるまでに個体数が減少しましたが、80年代に入ると個体数が回復しはじめ、今日では放流魚などの食害や、ねぐらとして利用される樹林の樹木枯死が社会問題として各地で取り上げられるようになりまし。そこで、2004年に鳥類で初めてカワウのマニュアルが作成され、特に広域連携の必要性や、被害防除の徹底、自然復元を含めた生息環境管理の必要性が強調されています。



写真1. 河川にいるカワウ。

これを受けて、2004年度から環境省がカワウ保護管理の広域連携推進のための事業を始めています。現在、関東地域で国、都県、自然保護団体、漁業関係団体、専門家からなる科学委員会等による「関東カワウ広域協議会」が立ち上がり、中部・近畿地域でも広域協議会の設置に向けた準備が進められています。関東カワウ広域協議会では指針が策定され、今後、関係する行政機関や関係団体が連携して、対策の実施やモニタリングを始めることになります。

※ 特定鳥獣保護管理技術マニュアルのカワウ編は、環境省のホームページからダウンロードできます。

<http://www.env.go.jp/nature/report/h17-03/>

#### 2. 広域協議会への参加

バードリサーチは、人とカワウが共存していける社会を模索しています。その1つの形が、カワウがたくさんいても大きな被害問題とならない状態を作り出すことだと思います。そのためには被害を訴えている漁業関係者などとも話し合いながら、被害を減らしていくことが必要だと考えています。広域の仕組みができることで、防除対策が効果的に機能するようになり、被害を減らすことができるのではないかと期待しています。しかしその一方で、広域的な一斉駆除だけが一人歩きする危険もあります。

バードリサーチでは、科学的な検証のもと、被害を減らす効果がある場合には、銃器などによる有害鳥獣捕獲（駆除）

も対策の中に組み込まれる余地があると考えています。しかし、駆除に頼るあまり防除対策や生息環境管理などの取り組みがおろそかになったのでは意味がありません。被害軽減の効果が得られないまま、毎年大量の駆除を続けなければいけないことになってしまえば、それはお金と命の無駄遣いでしかなくなります。そこで、バードリサーチでは、科学的な検証のもと、無駄の少ない対策がとられ、着実に被害を減らしていけるように、広域協議会の事務局をサポートしています。

#### 3. 自主調査

事務局という立場とは別に独立した立場で提案をしていくために、自主的な調査は必要だと考えています。バードリサーチでは、たくさんの方々に参加していただいて、関東のカワウの個体数と分布を調べる「関東カワウモニタリング調査」を行っています。この調査は、カワウの生息状況を知るだけではなく、被害を減らすための新しい方法を見つけて提案することにも役立ちます。新しい方法が少しずつでも実証されていけば、カワウの駆除を主張している被害者の方々にも納得していただいた上で、無駄に殺されるカワウを減らすことができるのではないかと考えています。

#### 4. 情報共有や普及などの活動

被害を減らす努力をする一方、カワウの生息を許容できるねぐらやコロニーを確保していくことも必要です。しかし、ねぐらやコロニーでは樹木の枯死などの問題が起きます。そこで、この問題とうまく付き合っていくための技術が必要になってきます。武蔵丘陵森林公園から受託した事業では、コロニーを抱える公園等の管理者間での情報共有のための検討会を運営することになっています。そこで、こうした技術についての検討がなされ、参加している公園等で検証されていけば、ねぐらやコロニーでの共存のための技術の確立につながると期待しています。

また、カワウとのうまい付き合い方を普及していくことも大事だと考えて、効果的な被害防除対策についての情報発信や、鳥学会での自由集会の開催、各地での漁協や一般の方々を対象とした講演、行政向けの研修会の運営、千葉県協議会への委員としての参加などの活動も実施しています。



写真2. コロニーにいるカワウ。

#### 5. お願い

行政等からの委託事業については守秘義務もあるため、その活動状況を随時皆さんにお知らせすることができませんが、バードリサーチでは、人もカワウも棲みやすい環境を作るために必要なことをやっていく、という考え方のもと活動していますので、ご賛同いただき、調査などの際にご協力いただければ幸いです。ご意見などありましたら、バードリサーチ (info@bird-research.jp) までメールをください。活動に反映させていきたいと思っています。



## 調査参加者募集

### 日韓合同トモエガモ カウント調査(2006年)

トモエガモプロジェクト日本チーム事務局/  
バードリサーチ嘱託研究員 田尻 浩伸

#### 1. トモエガモカウント調査にご協力下さい

トモエガモタスクフォース・トモエガモプロジェクト日本チームでは、昨年、一昨年に引き続き今年も日韓合同のトモエガモカウント調査を実施します。日本と韓国での同時カウントを行っていくことで、トモエガモの総個体数や分布状況、越冬地の変化を知ることができます。また、将来トモエガモの越冬個体群を分散させる場合の候補地選定など、保護管理に役立てることができます。

そこでぜひ、2006年1月のトモエガモカウント調査へのご参加と、トモエガモの情報提供にご協力下さい。また、お知り合いの方にも調査についてお伝えいただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願い致します。



トモエガモ。[ Photo by 大畑孝二 ]

#### ● 2006年の日韓合同調査は1月15日！

名称： 日本・韓国合同トモエガモカウント調査(2006年)

調査日：2006年1月15日(日)

(不可能な場合は12～18日の間のいずれか一日)

対象種：トモエガモ(可能であれば、雌雄別に記録)

ご提供いただきたい情報：

1. トモエガモの個体数  
(※調査の結果、0羽だった場合にもお知らせ下さい)
2. 調査地の名称
3. 調査地の所在する都道府県名と市町村名
4. 調査地の緯度、経度または環境省メッシュコード  
(※分かればで結構です)
5. 調査日時
6. 調査者氏名とご連絡先

※お送りいただいたデータが委託調査による場合は、委託主のお名前もお知らせ下さい。こちらから委託主の方にデータ使用または報告書の送付をお願いするなど対応いたします。

#### 2. データの使用について

いただいたデータは、韓国のもものと合わせてなるべく早く何らかの形で公表します。また、web、一般誌、専門誌、その他の媒体で使わせていただくことがあります。情報をお送りいただいた方、調査にご参加いただいた方のお名前は、可能な限り、公表の際に謝辞などにあげさせていただきます。

#### 3. 2005年の日韓合同調査の結果

日本国内では45名以上の方の協力のもと、55ヶ所の河川、湖沼などにおいて、1月12～18日の間のいずれかの日に調査が実施され、韓国では1月15日に調査が行われました。その結果、国内では1657羽のトモエガモが確認されました。最も多かったのは石川県河北潟の491羽、ついで佐賀県新拓遊水池の330羽、愛知県木曾川立田大橋上流の157羽と続きます。この3カ所で、全体のおよそ60%を占めています。例年と同じく、トモエガモは数カ所の湖沼では大群で確認され、その他の湖沼では少数しか記録されないという、局所的な分布を示しているようでした(図)。

2004年1月の調査で多くのトモエガモが記録された新潟県朝日池(616羽)や鳥取県米子水鳥公園(420羽)では、2005年1月の調査では少なく、年によって飛来数や飛来する場所に変化があることも改めて確認できました。

今回、韓国の結果も合わせてお知らせしたかったのですが、まだ韓国のデータが手元に届いておらず、お知らせすることができませんでした。韓国のデータの到着を待ってお知らせする予定であったため、2005年1月の調査にご協力いただいた方にも、まだ調査結果をお知らせしていませんでした。誠に申し訳ございません。

2004年1月の調査結果は、下記のWebサイトでご覧いただけます。韓国で撮影されたトモエガモの大群の飛翔も動画でご覧いただけます。

[www.jawgp.org/anet/anafo602.htm](http://www.jawgp.org/anet/anafo602.htm)

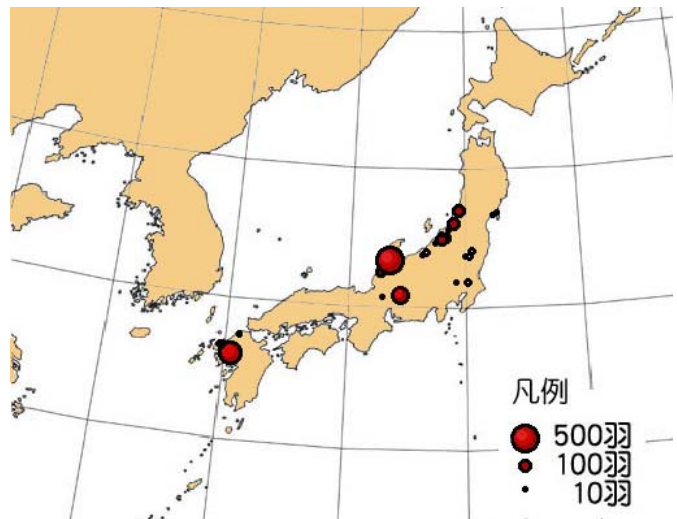


図. 2005年1月のトモエガモの分布(国内)

#### 4. データ等の送付、お問い合わせは・・・

田尻(山本)浩伸

〒922-0564

石川県加賀市片野町子2-1 加賀市鴨池観察館

電話： 0761-72-2200

ファックス： 0761-72-2935

E-mail: tajiri@ce.wakwak.com

※トモエガモプロジェクト日本チームについては、

<http://www.jawgp.org/anet/anafo.htm> をご参照下さい。

# エゾライチョウ 英: Hazel Grouse 学: *Tetrastes bonasia*

## 1. 分類と形態

分類: キジ目 ライチョウ科

全長: 36cm 翼長: 165-177mm

尾長: ♂111-130mm ♀108-120mm

嘴峰長: 12-15mm ふ蹠長: 34-38mm

体重: ♂339-432g ♀319-421g

※Fujimaki (2005) より. 尾長はオスのほうが有意に長い.

### 羽色:

背側は灰褐色で黒い横斑があり、嘴の基部から頸側面にかけて白く、腹側は褐色、黒色、白色のまだら模様。頭には冠羽がある。雄の喉部は黒く、雌に比べて腰の灰色が顕著。ライチョウと異なり冬でも白くなることはない。



写真1. エゾライチョウのオス成鳥。

### 鳴き声:

「シーツ、シィ、シィ、シィ」と高い音(周波数は6.5~8kHz)で、最初の音節は長く、第二音節以降はそれよりやや短く、次第に断続的となって終わる。笛を吹いたときの音に似ているので、「ホイッスリング」とも言われる。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

ユーラシア大陸のスカンジナビア半島からオホーツク海沿岸までとサハリン、北海道に分布する。

### 生息環境:

北海道では、平野部や高山帯を除く、おもに標高200~800mの常緑針葉樹林、針広混交林、落葉広葉樹林に生息し、カラマツ人工林にはほとんど生息しない(藤巻 2002)。

## 3. 生活史



生活史: 1年の生活: 留鳥で、大きく繁殖期と非繁殖期(9月~翌年3月)、繁殖期はさらにつがい形成期(3月末~4月)、産卵・抱卵期(5月下旬~6月中旬頃)、家族期(6月中旬頃~8月末)に区分できる。図鑑などには、雄が抱卵中の雌、また雌と幼鳥とからなる家族群を守るという解説が見受けられるが、雌の抱卵が始まると雄は単独となる。6月中旬には雛が孵化し、雌は幼鳥と家族群となる。9月になるとほとんどが単独であり、10月~翌年3月には単独個体のほかに群れも見られるようになる(藤巻 2002)。ただし、群れの大きさは多くても5羽程度である。

### 繁殖システム:

なわばりをもち、一夫一妻制であるが、スウェーデンにおけるテレメーターを用いた研究(Swenson & Boag 1993)によると、繁殖期に1羽の雌が隣り合ってなわばりをもつ雄2羽の行動圏を行き来しており、一妻多夫と思われる例も観察されている。

巣: おもに立木や伐根のわき、堆積した枯木の隙間などの地上に枯葉を敷いて巣を造る。



写真2. エゾライチョウの巣。

卵: 卵の長径40mm, 短径28mm, 卵殻は淡茶色に暗褐色斑がある。産卵は平均1.5日に1卵で、一腹産卵数は4~9卵, 平均7.0卵。



写真3. エゾライチョウの卵。

### 抱卵・巣立ち:

雌だけが抱卵し、抱卵期には6:00前後と18:00前後に約30分採餌のため巣を離れる。初期には抱卵は断続的であるが、やがて前述のように規則的な完全抱卵となる。抱卵期間は完全抱卵になってから23日(芳賀・鷹股 1986, 北海道保健環境部自然保護課1993)。孵化後1~2日で巣を離れる。ふ化時に体重11g, 翼長26.0mmで、約120日くらいで成鳥とほぼ同じ大きさになり(笹岡・藤巻 1990)、9月中~下旬までに外観も成鳥とほぼ同じとなる。

## 4. 食性

植物質、おもに木本や草本の葉や種子、落葉広葉樹の冬芽や尾状花序、果実を食べるが、幼鳥のときには昆虫など動物質が多い(藤巻 2002, Fujimaki 2002)。摂食量は冬に多く夏に少なくなるが、雌では産卵期に多くなり抱卵期に減少する(藤巻ほか 1994)。

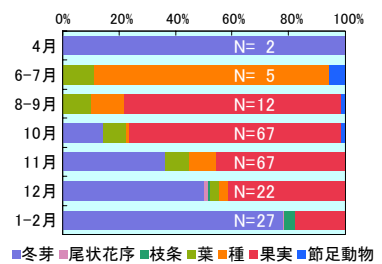


図1. エゾライチョウのそ養内容物の類別乾燥重量の占有率(%)。Fujimaki 2002 より作図。

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ●エゾライチョウ特有の行動

非積雪期には樹上を囀とするが、冬積雪が30cm以上になると樹上から積雪めがけて飛び降り、雪中にもぐってそこを囀とする(芳賀ほか 1987)。繁殖期と秋に、雄はよく鳴くほか、翼をはばたいて音をだす「ドラミング」を行う。ドラミングは地上からはばたきながら飛び上がり、長さ4~5m, 高さ2~3mの弧を描くものと、なわばりへの侵入者に対して音のは



げしいはばたきで突進するものがある。繁殖期になると、雄は胸をはり尾羽を広げて雌の周りをゆっくりと歩く。やがて雌は腹部を地表に着けるように低い姿勢となり、頭部を「イヤイヤ」するように左右に振る行動をする。これがきっかけとなり交尾が行われる。抱卵中の雌は巣を離れるとき、卵の上に枯葉をかけるが、このときの行動が面白い。巣から立ち上がると少し歩き、巣を背にしたまま近くにある枯葉を嘴にくわえ、肩越しにそれを巣に向かって投げ、これを数回繰り返す。そして枯葉が卵を覆っていることも確かめずにゆっくりと歩いて採餌に向かうのである。この行動を何回か観察したが、枯葉が卵の上に落ちることはまれであった。

●保護上の課題

生息数は不明であるが、狩猟統計によると北海道では1920～1950年代には1猟期に5～6万羽が捕獲されていたが、1970年代以降に減少し続け、捕獲数は1990年代には1,000～2,000羽と

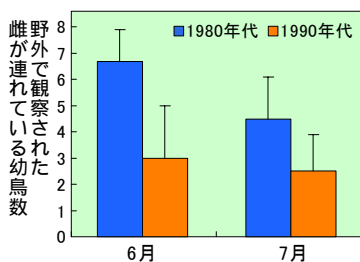


図2. 雌が連れている幼鳥数の変化.

り、2002年度以降には1,000羽以下となった。狩猟登録者数当たりの捕獲数も、同様の減少傾向を示している(Fujimaki 1995)。また、ラインセンサス結果や探鳥会の記録(Fujimaki 2000)、環境省(庁)の調査でも、生息数は1970年代前半から1990年代初めにかけて減少している。また雌が連れている平均幼鳥数は、1980年代までは6月に6.7羽、7月に4.5羽であったが、生息数が減少した1990年代以降には6月に3.0羽、7月に2.5羽と有意に少なかった(図2)。減少の原因は不明であるが、1960年代末からウシの飼育頭数の増加に伴う畜産廃棄物の増加やシカ猟後に放置された一部の死体がキツ

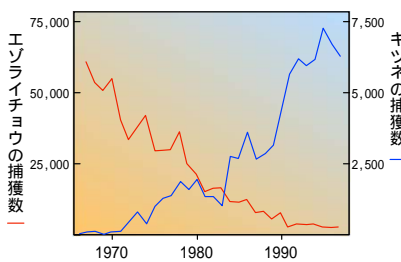


図3. 北海道におけるエゾライチョウとキツネの捕獲数の推移.

ネの食物となったことにより、キツネが増加した。その結果キツネの捕食圧が高くなったことが原因と考えられ、エゾライチョウの減少とキツネの増加の時期は、一致している(Fujimaki 2000, 図3)。

さらにエゾシカによる樹木の食害により落葉広葉樹の枯死がおきている地域ではエゾライチョウの生息数が減少している場合もある(北海道 1997)。北海道では1970年代後半から、大規模な皆伐・単一樹種造林が行われていないため生息に不適なカラマツを主とする人工林も増えておらず、最近では森林法の改正に伴って森林の機能類型を「水土保持林」、「森林と人との共生林」、「資源の循環利用林」に3区分し、それぞれの区分に応じた森林経営が行われているので、林業そのものにより生息環境が悪化していることはない。キツネ、シカといった特定種の増加が他種の生息状況に影響を与えていると考えられるので、特定種が

増加しないような野生動物の保護管理が必要である。そのためには、生息環境や生息数、個体群構成に関する現況調査、その結果に基づく保護管理の方針、対策の決定、その後のモニタリング、調査結果に基づく方針、対策の再検討というような保護管理システムの確立が欠かせない。

6. 引用・参考文献

Fujimaki, Y. 1995. Status of the hazel grouse in Hokkaido, Japan in 1923-93. Proceedings of International Grouse Symposium, 168-169.  
 Fujimaki, Y. 2000. Recent hazel grouse *Bonasa bonasia* population declines in Hokkaido, Japan. Japanese Journal of Ornithology 48: 281-284.  
 藤巻裕蔵. 2002. エゾライチョウの生物学. 日本鳥学会誌 51: 74-86.  
 Fujimaki, Y. 2002. Food habit of hazel grouse in Hokkaido, Japan. Journal of Yamashina Institute for Ornithology 34:73-79.  
 Fujimaki, Y. 2005. Body size of hazel grouse *Bonasa bonasia* from Hokkaido. J. Yamashina Inst. Ornithol. 36: 129-132.  
 藤巻裕蔵・宮沢由香子・笹岡久美子. 1994. エゾライチョウの人工飼料と摂食量. 日本鳥学会誌 43: 49-59.  
 Fujimaki, Y. Miyazawa and K. Sasaoka 1997. Intake of buds and catkins of birch by captive hazel grouse in winter. Japanese Journal of Ornithology 46:1-6.  
 芳賀良一・鷹股修一. 1986. エゾライチョウ *Tetrastes bonasia* の生態および人工繁殖に関する研究1. 繁殖生態, 人工ふ化および飼育管理. 鳥 34: 105-125.  
 芳賀良一・横田寿男・鷹股修一. 1987. エゾライチョウ *Tetrastes bonasia* の生態および人工繁殖に関する研究 2. 北海道東部における冬期の行動圏, 日周活動ならびに就峙行動. 鳥 35: 145-154.  
 北海道. 1997. 平成8年度エゾライチョウ生息実態調査報告書. 北海道, 札幌.  
 北海道保健環境部自然保護課. 1993. 野生動物分布等実態調査報告書, エゾライチョウ生態等調査報告書. 北海道保健環境部自然保護課, 101p, 札幌.  
 笹岡久美子・藤巻裕蔵・1990. エゾライチョウ幼鳥の人工飼料と摂食量. 日本鳥学会誌 39:25-32.  
 Swenson, J. E. and D. A. Boag 1993. Are hazel grouse *Bonasa bonasia* monogamous?. Ibis 135:463-467.

執筆者

藤巻裕蔵 帯広畜産大学名誉教授  
 /山階鳥類研究所客員研究員

当初の研究対象はノネズミ, 1970年ころから鳥類も研究対象とするようになり, 1975年ころからは鳥専門となる。環境と鳥類の生息状況との関係, 北海道の鳥類の分布に関心がある。エゾライチョウの研究は大学で前任者から引き継いだものだが, いつのまにか自分の主要テーマとなった。今後とも体の動く限りこれまでのテーマを継続するつもりである。

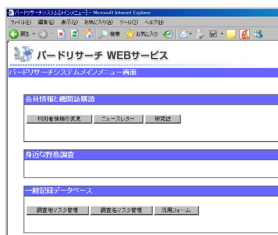


## 会員情報

### 1月16日にWEBサービスがスタートします

会員のみなさまの登録内容の変更, 参加している調査のデータ入力や管理, 個人的なバードウォッチングの記録などが行なえる個人ページ, 「バードリサーチWEBサービス」がスタートします. 今月はまだすべての機能はそろっていませんが, 徐々に追加していく予定です.

1月16日(月)にメールでお届けする利用者名とパスワードで, ホームページのメニューの一番上の「ログイン」ボタンからアクセスして下さい.



バードリサーチWEBサービスの画面. 会員区分や参加している調査によって必要なボタンが配置されます.

### ● 利用者情報の変更

会員のみなさまの登録内容やパスワードの変更が行えます. メールアドレスの変更や引越などの時は, ここで変更することができます.

### ● ニュースレターの閲覧

ニュースレターのHTML版とPDF版を閲覧することができます. 現在のページからは, 概要版しか見ることができません.

### ● 研究誌の閲覧

研究誌を購読している会員の方は, 研究誌を閲覧することができます. 現在のページからは, 要約しか見ることができません.

### ● 参加している調査のデータ入力と野鳥記録用データベース

季節前線ウォッチやベランダバードウォッチ, そして汎用的な野鳥記録データベースなど, みなさまの観察した野鳥の記録を保存しておき, 検索や集計リストの作成ができます. 近日公開予定ですので, ご期待下さい.

## ボランティア募集

### 文献データ入力へのご協力をお願い

文献データの入力のお手伝いいただけませんか?

Ornithological Worldwide Literature (OWL) というデータベースをご存知でしょうか? 世界各国の研究雑誌の目次を検索できる鳥類文献データベースです.

最近インターネットが発達して, いろいろなサイトで無料で文献検索ができるようになってきました. しかしそういった文献サイトでは, 有名雑誌の文献については探すことができますが, 小さい研究雑誌まではなかなか検索することができません. 珍しい行動を観察した時に, 類似の観察記録を探したりすることがあると思いますが, 有名雑誌にはそういったちょっとした記録は掲載されることが少ないので, 検索サイトには登録されていないような小さい雑誌を一つずつ探さなければいけません.



OWLのサイトの検索画面.

OWLは小さな研究雑誌を含めた世界各国の論文情報を, 各国のボランティアの手で入力しているデータベースです. ちょっとした情報も検索することが可能で, 便利に使えると思いますので, 利用してみてください.

バードリサーチではこのデータベース入力の日本の窓口をしています. 主要な雑誌については, すでに担当が決まって入力が進められていますが, 山階鳥類学雑誌など一部の雑誌はまだ入力担当者がいません. また博物館の紀要についても鳥に関する論文が載っているかどうかをチェックして入力していく必要があります.

どなたか入力にご協力いただける方はいらっしゃいませんか? 英語での入力になりますが, 英語が堪能である必要はなく, 中学生レベルでOKです. もし協力いただける方がいらっしゃいましたら, 植田までご連絡ください.

【植田睦之 mj-ueta@bird-research.jp】

### 参考ホームページ

Ornithological Worldwide Literature  
<http://egizosrv.zoo.ox.ac.uk/OWL/>

バードリサーチニュース 2006年1月号 Vol.3 No.1

2006年 1月 13日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: info@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎